

白河学フィールドワーク3

修学遠足 国造と比売神の白河

2009. 8. 30 (日)

白川国造神社

参加者が少数であったため、先日「ひよ子隊」で行った小田川地区、岩窪切岸城址は通過して泉崎観音山磨崖供養塔婆群のある白川国造神社跡に向かう。コンビニの駐車場に車を置いて、二瀬川沿いに少し行くと高速道路の橋桁が屋根のようになって磨崖仏が岩にびっしりと刻まれ、不思議な空間に出会う。白河学の遠足案内に国造建彌依米命と誤って記してしまった。現地の石柱には稲穂都美山命と書いてある。国造建彌依米命は岩背国造である。白河国造は塩伊乃己自直を初代として書き残されているのだが、稲穂都美山命とは何に書き残っているのだろうか。そして国造制の時代に関和久白河郡衙、下総塚、谷地久保、野地久保、借宿、地区の考古学的確定地から少し離れたここ踏瀬地区に国造神社があるのだろう。ただ原山一号古墳が付近にあって五世紀末国造の本拠地はこの周辺にあったとされている。(白河市史)

二瀬川の岩壁に板碑状のものがびっしり彫りこまれ、釈迦来迎のレリーフや五輪塔が暗がり大きくドンと静寂なはずの風景の中に立ち、頭上を騒々しく文明の車輻が猛スピードで橋を響かせてゆく。目を閉じて古代の景色を想像する。大正15年に調査したときには326基を数えたそうである。造られた当時は踏瀬は白河結城氏の宗家、下総結城氏の所領であったが所縁は分かっていない。

橋の下を潜り抜けると山道を登って、竹藪と荒れた暗い林の中をゆく。道の屈曲点に石碑があって稲穂都美山命と記してある。その上に広場に出る。まっ平らな広場は高速道路造成時に新たに作られたものなのかは分からない。奥に小堂や石碑が並んでいる。藪の奥に山頂への道はないか、探したが分からない。はたして、ここは国造の墓地なのか、遠くを見やるも木々に囲まれて何も見えない。





延喜式内社飯豊比売神社

参加者の子供にアイスクリームを買ってやり、大信の運動公園で昼食をとる。おにぎりを頬張り蝉の声の降り注ぐ涼しい木陰で遠足の気分を満喫した。大信方面から外面で右折して飯土用へ向かう。福島県には数多くの飯豊地名があるが白河地方の飯豊は「陸奥国風土記」逸文に記載され、また「白河風土記」にも飯土用鹿島社とされ飯豊青尊を祀る飯豊

比売神社がある。県道281号沿いの円錐形の小山自体が頂上に神社を乗せて見えてきた。式内社を強調するように「延喜式内社飯土用姫命」と刻まれている。石段の下に小さな沼が青空を映し、この沼も神社の大切な装置の一部に違いない。真っ直ぐ登る石段はわりと新しく、近年修復されたのだろう。頂上には古びた小屋に見える鞘堂に小型の宮が納められ、周りにある岩が神の依り代であろう。なにか小ピラミッドの上にいるようで、小山自体が人工的である。この地で鹿島様と呼ばれるように明治になって改めて飯豊比売神社に称されたようである。「飯豊」とは何であろうか。谷川健一氏も「青銅の神の足跡」の中に青の一族という章をつくり、飯豊の青皇女を思索する。氏は飯豊、青、青海、忍海、飯高、飫高、全ては「オウ」と読み、神八井耳命を祖とする多氏との関係を探っている。そういえば、鹿島社を背負って浜通りを北進したのも多氏や物部氏であったことを思い起こす。中通りにも飯豊と鹿島をセットにする神社が他にもある。

